龍谷大学保管の安重根の歴史資料とその平和利用[1)]

李　　洙　任

論文要旨

龍谷大学は、1639年に浄土真宗本願寺派の僧侶を育成する学寮として創設され、380年以上の歴史を持つアジアで最も長い歴史を誇る教育機関の一つで、その長い歴史的背景から多くの貴重な歴史資料を保管している。しかし龍谷大学が保管する歴史資料の中で対応が大変困難なものがある。その一つは「安重根が揮毫した遺墨」である。

安重根とは、初代韓国統監を務めた伊藤博文を北満州のロシア帝国が権益を持つハルビン駅構内で襲撃し（1909年10月26日）、暗殺し、ロシア官憲に逮捕されて日本の関東都督府に引き渡され、旅順刑務所にて処刑された人物である（1910年3月26日）。安重根がなぜ伊藤を暗殺したのかなどの動機・背景の解明はもとよりのこと、安重根がどのような人物だったのかを知る機会は日本の教育現場においては皆無に等しい。むしろそのような議題を掘り下げて理解しようとすることが日本社会ではタブー視されていると言っても過言ではない。このような歴史的背景から、龍谷大学が保管している安重根の遺墨は長く死蔵のごとく社会にその存在を知らされずにいた。

ところが安重根の息が吹き返したかのように遺墨の存在が社会に知らされることになった。2013年5月に龍谷大学社会科学研究所付属機関・安重根東洋平和研究センターが創設されたのである。センター名は、安重根が希求した「東洋平和思想」に由来する。センターの具体的な目的は、安重根が強く訴えた東洋平和思想を現代の課題に関連づけ、社会に直結する弾力的な研究活動を行うことである。

今日のような暗澹たる時代だからこそ、安重根の遺墨は重要なメッセージ性を持つ。本稿は安重根東洋平和研究センターの進展の記録である。

私は、安重根が残した遺墨を目にしたとき、思わず背筋を伸ばした。それは、彼の筆跡とその内容から、安重根という人がどれだけ自分に対して厳しさを持っていたかを感じたからである。とくに、「不仁者は苦しきに耐えることも、楽を持続させることもできない」と著されている遺墨は、自分に甘く、自堕落な生活を送る私を責める様だった。今日からはこの言葉を胸に置き、身を引き締めて生きねばと思った。

上記は、筆者が龍谷大学で開講した龍谷大学教養特別講座「東アジアの未来；アジア共同体の創成に向けての国民国家を超えたグローバル観」を受講した学生によるもので、「図書館で展示されている安重根の真筆を見てあなたは何を感じたか」という問いに対しての学生からのコメントである。

はじめに

筆者が教育者かつ研究者として 25 年間勤務した（1996 年 4 月着任、2021 年 3 月定年退職）龍谷大学は、1639 年に浄土真宗本願寺派の僧侶を育成する学寮として創設され、380 年以上の歴史を持つアジアで最も長い歴史を誇る教育機関である。龍谷大学は、その長い歴史的背景から多くの貴重な歴史資料を所有している。その中で龍谷大学の至宝と位置づけられているものは、「龍谷大学図」と呼ばれている世界最古の地図、「混一疆理歴代国都之図」（こんいつきょうり・れきだいこくとのず）である。略して「疆理図」（きょうりず）と呼ばれている。

「混一疆理歴代国都之図」は、1402 年に李氏朝鮮で作られたもので、この地図がいつごろ、またどのような経緯で日本にもたらされたかは不明である。浄土真宗本願寺派第 22 世法主大谷光瑞が朝鮮で買い求めたという説と、16 世紀末の文禄・慶長の役の際に獲得したものを豊臣秀吉が西本願寺に与えたという説などがあるが、正確な入手経路は知りえていない[2)]。このように入手経由は不明であるものの、浄土真宗本願寺と朝鮮半島の関係性を物語る貴重資料の一つであると言える。しかし、文化財返還訴訟や戦後補償の問題と兼ねあって、これらの歴史資料の有効利用や資料にまつわる情報を社会へ積極的に発信することは容易ではない。

龍谷大学は、その扱いが難しい歴史資料をもう一つ保管する。それは本稿のテーマである「安重根が揮毫した遺墨」である。安重根（アン・ジュングン、ハングルでは안중근、1879 年 9 月 2 日–1910 年 3 月 26 日）とは、1909 年 10 月 26 日、初代韓国統監を務めた伊藤博文を北満州のロシア帝国が権益を持つハルビン駅構内で襲撃し、ロシア官憲に逮捕されて日本の関東都督府に引き渡され、1910 年 3 月 26 日に旅順刑務所にて処刑された人物である。とここまでは歴史教科書から日本人が学ぶ表層的な安重根に関する知識となる。しかし、安重根がなぜ伊藤を暗殺したのかなどの動機・背景の解明はもとよりのこと、安重根がどのような人物だったのかを知る機会は日本の教育現場においては無に等しい。むしろそのような議題を掘り下げて理解しようとする考えが日本社会ではタブー視されていると言っても過言ではない。このような政治・社会事情から安重根の遺墨の有効活用は困難であることから、龍谷大学の一部の教職員だけがその存在を知る歴史資料として龍谷大学図書館の貴重書庫に長く秘密裡に保管されていた。

ところが安重根の息が吹き返したかのように龍谷大学の遺墨の存在が社会に知らされることになった。まず 2008 年 10 月 25 日に「『韓国併合』100 年市民ネットワーク」が誕生し（以下、「100 年ネット」と略記）、そしてそれから 5 年経過した 2013 年 5 月に龍谷大学社会科学研究所付属機関・安重根東洋平和研究センターが創設されたのである。龍谷大学直轄の独立した研究センターとして誕生させるには無理があったので、社会科学研究所の付属機関、いわゆる下部研究機関として産声を上げたのである。筆者もその他大勢の教職員のように安重根の遺墨の存在はまったく知らなかった時代が長く続いたが、「100 年ネット」の活動に参加することによっ

てその存在を知った。歴史学者でもない筆者が、このセンターを介して奔走した動機は、やはり安重根という人物の気概に負う部分が大きく、安重根と信頼関係で結ばれた日本人僧侶や看守たちに感銘を覚えたからである。安重根の遺墨を平和利用し、専門分野の枠を超えて「安重根東洋平和研究センター」を創設し、複眼的な歴史認識の考察や未来に向けての平和思想の構築を実現するために学内外の多様な研究者たちにセンター研究員としての参加を依頼した。センター名は、安重根が希求した「東洋平和思想」に由来する。安重根が強く訴えた東洋平和思想を現代の課題に関連づけ、社会に直結する弾力的な研究活動を行うことをセンターの具体的な目的とした。安重根が没して 100 年以上経過した今日では世界中でナショナリズムが隆盛し、他者に対する反感、排除、嫌悪の気分が蔓延し、何よりも相互理解の基本でなければならない対話が断絶されつつある。このような暗澹たる時代だからこそ、安重根の遺墨は重要なメッセージ性を持つ。

安重根東洋平和研究センターでは、歴史的、政治的、経済的、文化的考察をとおして、未来 100 年のための日韓の歴史・経済・文化交流事業のあり方を展望するとともに、可能な限り具体的な事業を展開してきた。とりわけ市民的視点を堅持した民学共同をさらに進めることを重視することで、具体的諸課題の解決に資する共同研究を実践し、その成果を社会に還元してきたが、筆者を含む安重根の気概に魅力を感じた市民が多く存在したことがセンターの発展に繋がったと言える。また龍谷大学図書館が保管する安重根の遺墨を有効利用し、研究成果を教育分野で実践していくことも本センターの重要な活動課題としている。

ソフト・パワーとしての遺墨の効力

その教育分野の活動の一部が冒頭で紹介した龍谷大学教養科目特別講座「東アジアの未来：アジア共同体の創成に向けての国民国家を超えたグローバル観」である。筆者が龍谷大学を 2021 年 3 月に定年退職後は、龍谷大学政策学部教授の奥野恒久と農学部准教授の中田裕子に本講義が継承され、学生たちに支持される人気講座の一つとなっている。本講座はワンアジア財団（現在はユーラシア財団と名称が変更されている）から奨学支援を受けることによって、国内外からの講師の講義への招聘や、学生たちの韓国へのスタディ・ツアーなどを実践した。

この講義を筆者が始めたころ、学生たちのために安重根の真筆を閲覧する機会を持った。学生たちがガラス越しではなく自分たちの肉眼で安重根の真筆を閲覧する機会を作ったのである。このことは韓国の学生たちでさえ得られない貴重な経験となった。真筆の影響力は想像以上で、講演者と学生たちのやり取りも他講義では見られないぐらい活発な授業に発展させた。しかし、近年劣化が進んでいることから、韓国の安重根義士紀念館が龍谷大学に贈呈したレプリカを龍谷大学の図書館内で展示することになった（3 月と 10 月の年 2 回）。安重根の真筆は、素晴ら

しい講義より、またどんな優れた教科書より学生たちに強いインパクトを与え、学生たちの「共感力」と「受容理解力」を高めることに成功した。筆者はこの真筆の力をソフト・パワーと位置づけている。

ソフト・パワーという概念は、経済力や軍事力をハード・パワーとして捉えることにより、その対照的な力として認識されたものである。この概念を提唱したのは、アメリカのクリントン政権下（在任：1993年–2001 年）において国家安全保障会議議長、国防次官補を歴任したアメリカ・ハーバード大学大学院ケネディスクール教授のジョセフ・ナイで、国家が軍事力や経済力などの対外的な強制力によらず、その国の有する文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解、共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力のことをソフト・パワーと呼んだ[3)]。

グローバル化が進み、世界が縮小した今日、外交も新たな局面を迎えており、日本の外務省は『外交青書 2007』において、Public Diplomacy という新たな戦略を打ち出し、ソフト・パワーを重視している。外交は総力戦であり、もはや軍事・経済の力だけには頼れないとし、ソフト・パワーというのは、自分の望むことを相手にも望んでもらうようにする力のことであるとする。加えてソフト・パワーとは、パブリック・ディプロマシーをスムーズに推進する上での環境づくりをする力のこととともしている[4)]。

ジョゼフ・ナイや日本の外務省のソフト・パワーの位置づけは、自国の魅力を他国にアピールする力として解釈され、一方通行的な印象を与える。筆者は、龍谷大学が保管する安重根の遺墨を強力なソフト・パワーとして位置付け、固定化された歴史認識を瞬時に払拭するぐらいの影響力を期待したが、その効果は学生たちのコメントからおおいに実感できた。

安重根は、処刑された 1910 年 3 月 26 日までの 5 ヶ月という短い収監期間に 200 点ほどの遺墨を介して、自国である大韓民国の独立と東洋平和へのほとばしる熱望を自叙伝と遺墨に託した。現在までに韓国内外で確認されている遺墨は 62 点で、そのうち 26 点が韓国の国宝に指定されているが、その中の 4 点（3 幅と額装 1 点）を龍谷大学が保管している。岡山県笠岡市の浄土真宗本願寺派浄心寺から 1995 年に寄託された 3 点の遺墨は、表装されたもので手漉き和紙二枚をつないだ縦 1.5 メートル、横 40 センチのものである。

2015 年 10 月 22 日、既存の 3 幅に加え、新たに宗教法人願舩寺より龍谷大学に寄託された「獨立」（額装 1 面）である。この額装が、龍谷大学所管の遺墨の中でも特別なのは、自国の独立を願う安重根のほとばしる強い愛国心を感じるからである。遺墨の左下には、「大韓国人安重根書」と記されている。そして、その下に薬指が欠損した安重根の左掌の手形が押されている。ちなみに安は左利きであり、薬指が欠損したこの手の形から遺墨が安による真筆かどうかを確かめる有効な手段となっている。これは、1909 年に同志 11 人とともに断指同盟をもって、大韓独立に身を投じることを誓って指を切り落としたためである。ソウルに位置する安重根義士

紀念館の安重根の像の背後には、11 人の切断された指から流れた血で書かれた文字、「大韓民国」が掲げられている。

写真：額装『獨立』（龍谷大学図書館提供）

以下は、論語で書かれた遺墨の解説である（龍谷大学図書館提供）。遺墨を閲覧した学生たちの「共感力」に溢れたコメントもここに紹介したい。

『不仁者不可以久處約』
これは『論語』の里仁篇の中にある言葉で、「心なき者（不仁者）には、いつまでも貧しい暮らしをさせておいてはいけない。（きっと悪いことを仕出かすだろうから）逆に長く富貴な暮らしをさせても良くない。（安楽に慣れ、堕落してしまうだろうから）心ある者（仁者）は、自分の暮らしに満足し、知ある者（智者）は、自分の暮らしを社会に生かす。」という意味である。

『敏而好學不恥下問』
「敏にして学を好み、下問を恥じず」。『論語』の公治長篇にある言葉で、子貢がおたずねした、「孔文子はどうして文という（おくり名）なのでしょうか。」先生はいわれた、「利発なうえに学問好きで、目下のものに問うことも恥じなかった。だから文というのだよ」という意味である。わかりやすく言えば、「わからなければ敏速に調べ、身分でも、年齢でも、自分より下の人に聞くことを、恥とは思ってはいけない。」という意味となる。

『戒慎乎其所不睹』
「（君子は）その睹ざる所に戒慎す」これは、『中庸』の第１章の中にある言葉で、「君子は（いつも道を思って公明正大、あいまいな隠し事は避けて）内なる己自身を謹慎して修めるのである」という意味。わかりやすく言えば、「君子はいつも謙虚な姿勢で物事に接していくことが必要である。」という意味である。

学生のコメント：

1）私は、安重根の遺墨の中でも「敏而好學不恥下問」という言葉が一番印象に残りました。「利発で学問を好み、目下の人に問うことも恥じない」ということは、今、そしてこれから私たちが学問をする上でも重要となることだと思います。私はこの言葉を、積極的に学び、自分の無知を認め、決して傲慢にならず、知を探求する姿勢が重要なのだと解釈し、これから先学問をする上でずっと自分の心にとどめておこうと思いました。

2）私は個人的に「敏にして学を好み、下問に恥じず」という言葉が好きだ。私は小学生の時に論語を読む機会があり、少しだけ論語を勉強したことがある。だから、この言葉を聞いたことがあった。しかし、意味までは知らなかった。私は年下の人に質問したり、教えてもらうことは、あまり好きではない。プライドか何かは分からないが、年下の人より年上の人に教えてもらいたいものだ。しかし、利発な上に学問好きな人ほど、誰構わず、プライドなしに質問出来るのかなと思い、少し自分が情けなく感じた。

3）『「戒慎乎其所不睹（（君子は）其（そ）の睹（み）ざる所を戒慎（かいしん）す）」＝君子は自分で見聞しない、はっきりした事についても、いつも我が身を慎んで恐れおののいている。』僕は、これは伊藤博文へのメッセージじゃないかと思った。これが合ってるかどうかはわからないが、当時権力のあった伊藤博文のやり方（国民を使って植民地化を進めていったこと）に対し憤りだけでなく、安重根にとって哀れみのようにも見えたのではないかと思う。それをつづったものだと思う。ただもしこれが伊藤博文に対してならば、それは同時に伊藤博文を君子として表現しているあたりから認めてはいたのではないかと思った。

4）私が 1 番印象に残ったのは、「戒慎呼其所不睹」という言葉である。他の人が見ていない所で慎む、つまり誰もいない一人きりの時でも謹慎するという意味の言葉だ。安重根は牢獄の中で東洋平和論について一人で考えていたということを講義から学んだが、一人でこれほどの平和論を考えることができるのは、この言葉を実践していたからこその能力であるのかなと思った。

5）まず 1 番に目に飛び込んできたのは、薬指と小指の長さが同じ、不自然な手型であった。やはり実物（まじまじと見ていると、もしかして複製か、とも思ったりはしたが、間違っていたら大変失礼である。申し訳ない。）を見ると、指を切るほどの彼、また、彼を始

めとする義兵達の志の強さが伝わってきた。大げさに、ではなく、少し後ずさりしてしまうような迫力さえ感じた。それとは反対に、メインの文字は、上品、という言葉が近いだろうか、そのような印象を受けた。「人を暗殺したテロリスト」という、この一連の講義を受ける前の私の安重根へのイメージでは、もっと荒々しい、乱雑な文字を書いてるのでは、と思っていただろう。しかし実際は、静かな力強さが文字の奥からにじみ出てきている、整った、美しい遺墨であった。講義で学んだ彼の人間としての素晴らしさ、偉大さがそのまま現れていたように思う。その内容からは、彼の知力の高さ、心の美しさ、考えの崇高さがひしひしと感じられた。

また別日に、安重根を知らない友達として、タイ人の留学生の友達を連れて行った。彼女は日本の高校に通っていたため、日本語は何の不自由もなく通じる。タイでは安重根については全く習わなかったらしい。しかし、日本の高校に通っていたため、日本史で安重根を習ったと聞き、しまったと思った。だが、伊藤博文をハルビンで殺した人、としか知らないようであったため、これは、安重根を本当の意味で知らない、と言えるだろうと考え、彼女に説明をした。彼女もやはり、その遺墨の前に案内するやいなや、第一声として、「え！この人指切ったん？？」と言った。全てを説明し終わった後に、彼女が、「安重根ってすごいね。ただ、伊藤博文を殺したとしか知らなかったから、イメージが大きく変わった。」と言った。火曜日のグループディスカッションで出てきた意見、また私の意見と同じであった。やはり、日本の教育では安重根について全くきちんと教えられていないのだな、過去に目を閉ざしているな、ということを痛感した。ちなみにタイも、日本と同じように、自国の歴史教育では、過去に目を閉ざしがちな面があるようだ。過去にあった政府へのデモをきちんと教えなかったり、外国からの視点ではなくタイの視点からのみの捉え方で教えたりしているようだ。あくまで彼女いわく、ではあるが。

日本の大学生たちは、「学び」に関しては講師による講義に偏り、一方通行的な知識注入型授業で独自の思考を発展させる場面は多いとは言えない。しかし、本講義では、安重根の実際の遺墨を閲覧し、その後オンライン上のプラットフォームで意見を交換させることによってお互いの意見を知る機会を作った[5)]。ちなみにこのオンライン上のプラットフォームを使っての授業は筆者が龍谷大学に着任した時、1996年から始めており、コロナ禍がきっかけで緊急避難的な授業方式で始めた授業形態ではなかったことを付け加えたい。学生たちが自分の意見をもつ力は、他者に説明する場面を増やすことで強めることができる。学生コメント5の例からわかるように、安重根の遺墨を友人と一緒に図書館に出向き、授業で学んだ基礎知識（インプット力）を学生独自の価値観と結び付け、友人（他者）に説明することで（アウトプット力）、

学びが自分の力になっていく重要なプロセスであることを自覚することを目指した授業である。

写真：筆者の最終講義 2021 年 1 月 19 日、安重根の遺墨をバックに。
（龍谷大学図書館提供）

1990 年代の日本社会とメディアの影響

龍谷大学は、1995 年に浄土真宗本願寺派に属する岡山の浄心寺から 3 幅の安重根真筆遺墨と関連写真の寄託を受けた。安重根の遺墨が龍谷大学に寄託された背景に当時の政治事情があった。1995 年というと村山富市が、中国や韓国との国交正常化に最大限の尽力をし、行動をおこした総理大臣として知られている。現職総理大臣としてはじめて盧溝橋と中国人民抗日戦争記念館を訪問した。「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議（不戦決議）の可決を実現、そして「財団法人女性のためのアジア平和国民基金」（アジア女性基金）を発足させ、形式だけの謝罪ではなくこころが籠った誠意ある謝罪の姿勢を示した初めての総理大臣であった。

村山首相の隣国に示した誠意ある姿勢は、日本に対する印象を変化させただけでなく、政治の空気が一変したことで日本社会における意識変化のきっかけともなった。まずこの変化に敏感に反応したのはメディアであった。インターネットが今日ほど普及していない日本社会にお

いて、メディアの中でも固定化した歴史認識にメスを入れた最初のメディアは出版業界だった。そして、研究者レベルに匹敵する、もしくはそれ以上の調査を実行したのはノンフィクションライターたちであった。

まず、1994年にハードカバーの単行本として時事通信社から出版された『伊藤博文を撃った男　革命義士安重根の原像』を世に出したのが斎藤充功である。斎藤充功は、別の取材目的で浄心寺を訪問したときに、偶然に安重根の遺墨の存在を知ることになる。浄心寺の納屋で、ボロボロになったブリキ缶の中に、拡大鏡と一緒に写真と巻物類、そして安重根の真筆が三枚、ぐるぐる巻きになって突っ込まれていたのが発見されたのである。当時82歳だった住職の津田康道は、「遺墨を発見したときは本当に驚いた」と興奮しながらインタビューで述べ、斎藤はノンフィクション作家として安重根への好奇心を高めていく。

日本社会では、1990年代というと、インターネットが普及する前なのでテレビが最強のメディア力を発揮していた。1995年に安重根と日本人看守たちの関係をドキュメンタリーとしたテレビ朝日の「驚きももの木20世紀」、タイトルは「伊藤博文を撃った男」が放映された。本番組には、数名のゲストやコメンテーターが出演したが、その一人が斎藤充功だった。そして、同じくゲストの亜細亜大学名誉教授・中野泰雄は、「真実というものはそのままには死なない」と語り、中野の発言に続いてドラマチックな音響を背景に安重根の遺墨3幅がテレビ画面に大きく映し出された。安重根の力強い文字が、まさしくソフト・パワーとして機能したかのように、視聴者から「共感性」と「受容可能性」を得ることができるような番組であった。安重根という人物は、「単なるテロリストではない」というナレーションから分かるように、安重根の実像に近づこうとする番組制作者の意図が明確に理解できる内容で、まさしく当時の最強のメディアであるテレビという媒介を使って、公的に学ぶ歴史認識とは異なる視点でマス（大衆）にアピールしようとした。それは安重根が単なるテロリストではなく、むしろ人格的に高潔な自国を愛する軍人だった安重根の幼少期、そして彼が両班という当時の貴族に匹敵する高い地位に属する朝鮮人であったという内容である。また安重根に関するナレーションは、当時の朝鮮文化や人々の生き方そのものを偏見なく理解でき、当時の朝鮮の豊かな文化をも紹介した。安重根の高い教養度と人格の崇高さから旅順監獄の看守たちは安重根を崇慕したとするストーリーは、テレビ番組の制作者の意図どおり、安重根は視聴者のこころをも鷲掴みにしたのである。番組構成は安重根を「暗殺者」や「テロリスト」という言葉で切り捨てるような姿勢を脱却するための和解に向けての第一歩のようであった。安重根と伊藤博文の両者を取り巻いた当時の政治的、経済的、そして社会的要因を冷静かつ客観的に分析し、市民のこころに届くような内容にする力はこの番組制作者の力を説明するものとも言える[6)]。

斎藤充功に加え、もう一人のノンフィクションライターである佐木隆三が安重根に強い関心をもった。佐木も上記のテレビ番組「驚きももの木20世紀」でビデオインタビューを受けて

登場している。佐木は 1951 年に『復讐するは我にあり』で第 74 回直木賞を受賞し、『勝ちを制するに至れり』『死刑囚永山則夫』などを世に出した人気作家であった。1910 年 3 月に発行された『安重根公判速記録』（満州日日新聞社刊）のコピーが、文藝春秋の西永達夫と出版部の岡崎正隆を通じて、佐木の手元に渡された。その『公判速記録』は伊藤博文の孫である伊藤満州雄から提供されたことを著の末文に書いている。『公判速記録』が改行なしで組まれているゆえ、佐木はワープロで現代語に変換作業を自分で行っている。この現代語翻訳作業によって、安重根のウラジオストックからハルビンに至る計画行動などが佐木の頭に刻まれるほどになった。ハルビンにおける初期の捜査から、公判を通じて旅順監獄署における死刑執行まで、一貫して通訳の大任にあたった園木末喜について、資料が入手できないでいたところ、園木の孫である福岡博子に巡り着き、貴重な資料を拝借することができたとも書いている。佐木による調査は徹底しており、伊藤博文に関しての資料を収集するために、伊藤が撃たれたときに着用していた血染めの肌着のメーカーの特定まで専門家に依頼調査している。

斎藤充功は、安重根自筆の「敬天」の遺墨を日本の美術商が 2000 万円で売りたいというニュースを知り、そのニュースが放映された翌日が韓国の金泳三大統領（キム・ヨンサム、ハングル：김영삼、第 14 代大統領、在任 1993 年 – 1998 年）の初来日の日であることも偶然ではないと感じた。加えて、斎藤は安重根はこの「敬天」という遺墨を誰に贈ったのであろうかという疑問を持った。なぜならこの文字から五経四書を身につけていた安重根の教養の高さだけでなく、「敬天」のもつ意味に驚いたのである。

斎藤は、「敬天」の意味を『詩経』日加田誠の解釈を以下に紹介している。「朝廷（周）は、天に代わって地に法を施き、万民を養い育つべき責任を天に対して自覚せねばならぬ。天命の情無きを知り、天の怒りを畏れ、天の渝を敬しんだ」すなわち、天子は天の法則に則って民を養えば、民はおのずと天子に心服する、という意味で、民衆を搾取するだけの王朝であれば、民衆が離反して国は滅ぶという教訓である。相手によって文言を考え揮毫した安重根であったため、「天子」に擬した相手は、法院、あるいは監獄、または警察関係者ではなかったかと斎藤は問う。相手が真鍋法院長だとしたら、じつに山椒の利いたアイロニーと言えると斎藤はさらに安重根に関心を高めていった。

斎藤や佐木が安重根の実像を知ろうとする熱意は、どこから生じているのであろうか？彼らの熱心なかつ真摯な取材に対して韓国人も感銘し、取材先の人たちは惜しみなく協力した。安重根は大韓義軍中将であったことから、韓国では安重根義士と呼称されるなど「日本帝国主義と戦ったことから韓国、中国、そして北朝鮮で英雄化されている。一方、日本では「安重根はテロリストや暗殺者」と描写されていると思われがちだが実際はそうではないと斎藤と佐木は察知したのである。日本の歴史教科書では「伊藤博文を暗殺した人物」、「韓国の安重根が総督府の初代統監だった伊藤博文を射殺した」、あるいは「安重根は伊藤博文を射殺したため、日

本では暗殺者とされている」などと記されているが、「テロリスト」や「犯罪者」という表現は一切使われていない。また注目すべき点は、安重根に射殺された伊藤博文の公墓所地（東京都品川区）には、「日露戦争後、日本は大韓帝国の外交権を奪い、韓国の外交を管轄する権利を獲得する。博文は初代韓国統監として任命されるが、1909 年に韓国の独立運動家、安重根に暗殺され、68 歳の生涯を閉じた」と記されている。

政治利用される安重根のイメージ

日本の歴史認識は、時の首相の思想や行動によって隣国との関係性が大きく影響を受けることとなる。1985 年 8 月 15 日、当時の中曽根康弘首相が首相として靖国神社を初めて「公式参拝」を行った。隣国からの批判が高まるにつれて、これ以後の在任中の参拝は見送られたが、2006 年に当時の小泉純一郎首相が靖国の公式参拝を行った。日本では、1990 年代後半以降、「新しい歴史教科書をつくる会」のように、日本が過去に起こした戦争を侵略戦争とする見方にたいして「自虐史観」と非難する勢力の動きが強まり、それは「日本版歴史修正主義」とよばれることもある。歴史修正主義者たちは、1931 年の中国東北部侵略戦争開始以後、日本が中国大陸や東南アジア・太平洋地域で起こした戦争を「自存自衛の戦争」「アジア解放のための戦争」として正当化する[7)]。

そして、2012 年安倍晋三政権の復活によって歴史修正主義が強化されていき、安倍談話（2015 年）はそれまでの首相談話と類似しているように見えるが本質的な点が異なる。谷野隆[8)]（2012 年）が指摘するように、「一言でいえば、アジアへの謝罪は終わりにしたい」というのが本音で「反省とお詫び」の具体的な文がどこにも見当たらない。しかし、一方で日本社会での安倍談話への賛美も少なくなく、決して国民世論は一枚岩とは言えないのが日本の実情である。以下の市民の安倍談話に関しての感想を見ても理解できる[9)]。

> *日本語英語訳双方を熟読しました。大変よくできていると思います。国家の最大の目的は国民の生命と財産を守ることです。今、世界は第二次大戦終結以来未曽有の危機に直面していると思います。テロの脅威による無差別な殺戮、ロシアや中国のような無謀な拡張主義、北朝鮮などのようななならず者国家などなどと数え上げれば枚挙のいとまがないほどの危機の中に我々は生きています。安倍さんの談話で最も注視すべき点は今までのような謝罪の繰り返しを子や孫の世代に背負わせることはしてはいけないと明言したことです。どうして反対したり批判する人たちは自分たちの意見も言わず無責任に批判だけするのでしょうか。（男、60 代、自営業）*

2014 年 1 月 20 日、初代韓国統監だった伊藤博文を暗殺した安重根義士の紀念館が中国北東部のハルビン駅に開館したことについて、日本の菅義偉官房長官は記者会見し、「極めて残念であり、遺憾だ」と語り、「安重根はわが国の初代首相を殺害した犯罪者であり、死刑判決を受けたテロリスト」という挑発的な言葉を発した。中国に安重根の紀念館が設立されたことに不快感を示した菅官房長官の脳裏には異なった歴史認識に基づく発言ではなく、中国（習近平国家主席）が韓国（朴槿恵大統領）との協調姿勢を強め、安重根という人物を歴史認識の象徴として捉えたため、安倍政権が反発したに過ぎない。その後菅義偉が日本国の首相に就任した際、韓国メディアは「安重根をテロリストと呼んだ人物」と次期総理大臣を紹介したのである[10)]。

安重根の遺墨と市民運動

テレビ報道によって紹介された安重根の遺墨の存在は、日本社会に大きなインパクトを与えた。それはテレビ番組制作が意図したように、共感を強めた視聴者も多くいたのと同時に、安重根という明治の元勲・伊藤博文を暗殺した人物の残した遺墨に対して反感を強めた視聴者もいた。発見当時、浄心寺で安重根の遺墨の展示をしたことも関係したのか、韓国からは返還を求める人たちが押し寄せ、同時に強く批判する人たちからの嫌がらせの電話や FAX があり、浄心寺住職は寺の安全を図って安重根の遺墨を浄心寺から移す必要があった。浄心寺が、龍谷大学に保管を依頼した理由は、大学で保管したほうが安全で、研究資料としてのみならず、教育にも活かせるのではないかという住職津田康道の思いからであった。

このような経緯で、龍谷大学でその遺墨を保管することになったのだが、どういうわけか少数の大学関係者しかその存在を知らされておらず、「死蔵」に近い状態にあったこの貴重な歴史的資料を、社会に広くその存在を知らしめる努力を行った人物の一人が戸塚悦朗であった。戸塚は従軍慰安婦問題を世界に理解を求め、日韓関係だけの問題に収めず女性に対する性暴力と戦争の関係を明確にする重要な役割を果たしたことで知られており、従軍慰安婦問題では国内外で多大な影響を与えた弁護士かつ研究者である。神戸大学の助教授職を経て、龍谷大学のロースクールで教授として 2003 年から 2010 年まで教鞭を取っていた。戸塚は、龍谷大学と安重根の遺墨にどのように対応してきたかを論文に記録している。これらの論文において「対応が困難な安重根の遺墨」の存在を社会に顕在化しようとした戸塚の苦労と「死蔵」を続ける龍谷大学との間の葛藤と相克の経緯を時系列的に克明に記している[11)]。

戸塚が安重根の遺墨の存在を知ったのは、2005 年 11 月 5 日に開催された「龍谷大学教職員組合創設 40 周年記念シンポジウム：東アジアの平和と人権 ― 日本の課題」が開催された時のことである。そのシンポジウムに報告者の一人として戸塚が招聘され、「アジアとの和解のきっ

かけをどう創るか ― 戦時性的強制被害者問題の立法解決の努力を ― 」と題する講演を行った。そのシンポジウムに参加していた龍谷大学の教職員組合員三島倫八教授（当時経営学部）が戸塚に、本大学図書館に保管されている安重根の遺墨について語り、戸塚は初めてその存在を知ることになった。韓国側でも文化財の返還運動が強まる中で、龍谷大学教職員組合は安重根の遺墨の件に関しては重要な役割を担い、2010 年（日韓併合 100 年）に向けて、安重根の遺墨に注目する必要があるのではないかという意見が組合員から出た。戸塚は、角岡賢一（経営学部教授）に安重根の遺墨の所在の調査を依頼し、津田海純が浄心寺に持ち帰っていた遺墨が龍谷大学図書館に寄託されていたことを知る。

戸塚が初めて安重根の遺墨等を自ら閲覧したのは、2007 年 10 月 25 日のことで、2003 年 4 月龍谷大学（法学部）に赴任してから 4 年半も経った後であった。1997 年に岡山の浄心寺から龍谷大学に寄託された遺墨に関して、学内でその存在を知っているものは学部長経験者など少数に過ぎず、歴史資料としても貴重なもの故に、厳重に管理され、学内外を問わず人の目には触れることはなかった。戸塚は龍谷大学に対する配慮からか安重根の遺墨は「稀有な存在」と表現しているが、対応が極めて困難で、社会に公開しづらい歴史資料であった。ちなみに筆者は、1996 年 4 月に龍谷大学に着任したが、2008 年に「100 年ネット」が設立され、「100 年ネット」の活動によって安重根の遺墨が龍谷大学の学内で展示され、初めてその存在を知ることとなった。

龍谷大学内での賛同と反発

戸塚は、龍谷大学に保管されている安重根の遺墨の存在を知ったことで、大学に韓国への「寄贈」を提案し、もしそれが不可能であれば龍谷大学ミュージアムで常時展示を行うことを大学に強く提案した。ところが、戸塚が属する法学部の教授会で関心を示す教員、もしくは賛同する教員はほぼ皆無であった。関心を示さないというより、口を閉ざした法学部の教員たちが多かった。戸塚は、遺墨を龍谷大学ミュージアムに展示するよう提案した。戸塚は遺墨問題に強い関心を抱く前に、従軍慰安婦問題を法学部教授会で議論を始めているが、同学部の同僚から「この問題を繰り返すと損をするぞ」という警告のような助言を受けたと筆者に告白している。

2011 年開設予定であった龍谷大学ミュージアムに関する学内論議において、戸塚は遺墨をそのミュージアムにて常時展示するように強く要請したが、伊藤博文を撃った人物の歴史資料を龍谷大学から社会に発信することに大きな抵抗があり、戸塚は、学長に面談することもできず、この提案はまったく進展することはなかった。

龍谷大学に対しては「死蔵の罪」と厳しく批判する声が学内外から高まり、学内においても返還説を主張する教員が少なからずいた。戸塚は、龍谷大学学内で何の進展も見られない状況

が続いていたとき、安重根義士紀念館館長である金鎬逸（当時、韓国の中央大学名誉教授。歴史学専攻）と面談し、安重根の遺墨の韓国への貸し出しを可能にする方策を提案した。戸塚の背中を押し、支援したのが、龍谷大学外に設置された「100 年ネット」だった。「100 年ネット」は、龍谷大学教職員組合に加入していた龍谷大学経営学部の教員のみならず多数の研究者と市民が中心となって、設立された組織である。共同代表に名前を連ねた龍谷大学教員は、戸塚悦朗（龍谷大学法学部ロースクール教授）、三島倫八（経営学部教授）、田中宏（経済学部教授）、そして事務局長に就任した重本直利（経営学部教授）だった。重本の事務局長として組織運営力が抜き出ており、あくまでも第三者機関としての「100 年ネット」と「死蔵」を保とうとする大学との困難な交渉を進展させていく。加えて、「100 年ネット」の特徴は、学術研究者だけの運営ではなく、市民活動家や一般市民も多く参加したことにあり、「韓国併合」の歴史的経緯と植民地政策の欺瞞性を考察し、社会が知りえない史実を市民の力によって日本社会の市民へ発信し、東アジア地域さらには世界に平和を実現することを目的とした。要約すると学術研究が市民運動と連携し、弾力的な研究活動が可能になっていったのである。「100 年ネット」の対応は徐々に龍谷大学の姿勢にも影響を与えていった。

学術分野を超越した研究活動

三島倫八共同代表、田中宏共同代表、重本事務局長、そして戸塚の 4 名が交渉人となり、その交渉相手は、当時龍谷大学学長である若原道昭（学長就任前は短期大学部教授）、そして図書館長の平田厚志（当時文学部教授）であった。龍谷大学の関係者たちだけでは交渉の前進の見込みはなかったが、外部団体の「100 年ネット」がその核として役割を担ったのである。「100 年ネット」を運営した人たちは、他大学の教員たちの参加を促し、組織に縛られず縦横無尽に社会発信を行うことで多くの一般市民を呼び込み、関心度を高めていった。

2009 年 3 月 28 日、龍谷大学深草キャンパスにおいて「100 年ネット」の 3 月企画として、「なぜ安重根は、伊藤博文を撃ったのか？」と題した日韓国際平和シンポジウム[12] が開催され、筆者も参加したが、この時初めて安重根の遺墨の存在とその歴史的意味の大きさを知った。この日韓国際平和シンポジウムでは、安重根が旅順監獄で執筆が未完に終わった「東洋平和論」に着目し、哲学的批判を加えた法政大学の牧野英二（法政大学教授）が「日韓の歴史の新たな歩みのために ― 安重根義士と歴史の記憶の場 ― 」と題した講演を行い、日本での安重根の東洋平和論を近代哲学の骨格を築いた 18 世紀の哲学者イマヌエル・カント（1724–1804）の戦争の脅威に立ち上がる「永久平和のために」と関連づけた斬新な研究報告であった。また戸塚は、「検察官と裁判所が裁判管轄権の根拠とした 1905 年韓国保護条約は、締結されていなかった（仮に締結されていたとしても、絶対的に無効であった）のであるから、裁判所には管轄権を確立

すべき法的根拠がなかった。この裁判は、管轄権を欠いた不法な裁判である。」と衝撃的な講演をした。戸塚は民事裁判での処刑という判決を下した安重根裁判の不当性を法学的観点から批判した。戸塚が安重根に対する裁判を法学的観点から探求するきっかけとなったのは、韓国の歴史学者である李泰鎭との出会いであった。「100年ネット」主催によって2009年3月26日から4月1日まに「安重根100周忌」日韓国際平和シンポジウムが開催され、戸塚と李泰鎭はともに報告者として参加している。韓国の歴史学者である李泰鎭は、大日本帝国が日露戦争の勝利を背景に大韓帝国において強要した条約の問題点に関する研究において、安重根は避けて通ることができない存在であるとした（李泰鎭、2016年）[13]。この国際シンポジウムの後援には、龍谷大学、駐大阪大韓民国総領事館、龍谷大学教職員組合が名前を連ね、東アジアの恒久的平和の祈願をこめて、安重根の遺墨を一般公開した。遺墨の存在は、植民地支配の意味合いを一般の市民が理解できる一つの媒介となり、参加者総数は300名以上に膨れあがった。国内だけにとどまらず韓国との和解に向けての対話の橋渡し役を期待されて、遺墨の韓国への貸し出しの機運が龍谷大学の学内においても高まった。市民の力が大学を動かし、また学術分野を超越した研究に発展していった。

遺墨を介しての研究者たちの交流

龍谷大学に、ソウル書芸博物館ら韓国内では未公開である安重根の遺墨を、「安重根遺墨展」（会期：2009年10月26日～2010年1月24日）に出陳して欲しいとの依頼があった。龍谷大学が保管していた遺墨3点と関連資料88点のうち写真パネル27点を出陳し、龍谷大学の貴重資料の海外初公開となった。

遺墨展には韓国内外から約2万3千人の方が訪れ、100年前の安重根の生涯や思想、人間的な面が表れた絶筆を興味深く鑑賞され、盛況のうちに遺墨展は終了した。ソウル書芸博物館・企画展の責任者李東学芸部長は「龍谷大学の資料がなければ、こんなに大きく深みのある展示会は開けなかった」と語っている[14]。

この海外初公開に至るまでの道のりはたやすいものではなかった。龍谷大学の教職員から強い反対意見が表明され、その理由は一度韓国へ移動させると返却してくれないのではないか、という懸念や、紛失やなんらかのダメージが出た場合誰がどのように補償するのかというのが懸念材料であった。遺墨には多額の保険がかけられ、その費用はすべて韓国の安重根義士紀念館が負担し、大学の顧問弁護士が若原道昭学長に同席し、契約書を取り交わした。

図書館長の平田厚志と学長の若原道昭は、この遺墨貸し出しをきっかけに積極的に韓国の関係者たちと交流を深めていった。若原学長は個人的に韓国の安重根紀念館を訪問し、安重根の研究会にも参加するなど、形式的な学長としての業務以上の平和交流を行った。また平田厚志

図書館長も、安重根に関しての関心を深め、教誨師として旅順監獄で安重根と接触した長岡覚性と津田海純についての研究を開始し、その成果が「旅順監獄における安重根と二人の日本人教誨師」[15] という論文に結実している。

平田は津田海純がどのように安重根と遭遇したかを調査した結果、なぜ津田が遺墨を日本に持ち帰ったかを解明した。関東都督府旅順監獄が開設された 1906 年に、旅順監獄の初代教誨師に就任したのは、西本願寺関東別院から派遣された龍島祐天であったが、海純は龍島の助手として旅順監獄で勤務し始める。そして、1908 年 10 月に辞任した龍島に代わって、同年同月に二代目旅順監獄教誨師を委嘱された長岡覚性（長岡の在任期間は 1908 年 10 月 3 日～1913 年 2 月 6 日までの 4 年 4ヵ月間）の教誨助手として、引き続き勤務していた。従って、津田が勤務していた期間は、安重根が収監されていた時期と重なっている。海純は上司である長岡とともに教誨業務に就いていたと思われるので、安重根とは何度も接していたであろうと推される。ただし、安重根は簡単な日常会話は出来ても、複雑な日本語は解せず、一方、旅順監獄に勤務していたほとんどの日本人も朝鮮語を解せなかったので、相互の意志疎通は容易なことではなかったはずである。にもかかわらず、安重根の崇高な精神に日本人関係者がこぞって感服したとすれば、それは安重根という人物の人間的魅力に圧倒されたからに違いない。実際に安重根の遺墨を直接受け取ったのは、長岡覚性であって、長岡が助手である津田海純に日本に持ち帰るよう指示をしたのではないかと平田は推した。上司である長岡の指示であっても安重根の遺墨を日本に持ち帰ることは大変危険な行為であり、もし当局に知られれば自分たちの身の

写真：津田海純（龍谷大学図書館提供）

危険にもつながるほどであることが想像できる。獄中で安重根と接したほとんどの日本人は、彼の崇高な精神と豊かな人間性、そしてそれに不屈な人間力に感服しており、安重根を特別な想いをもって接していた日本人の一人が長岡であり、津田であった（平田、前掲論文）。

「100 年ネット」の後押しもあって、2011 年 3 月には龍谷大学図書館と韓国ソウルの安重根義士紀念館との間で学術研究・文化交流に関する協定書の締結に至った。併せてその締結を記念して龍谷大学主催で「日韓交流、新たな時代へ ― 日本における安重根関係資料の存在意義」と題して講演会も実施し、協定に基づく交流プランの具体案を一歩踏み出し始めた。

「国家安危労心焦思」― 安重根の懸念

安重根の遺墨の一つに「国家安危労心焦思」と書かれた遺墨がある。今、安重根が生きていたら同じ思いをもつのではないかというような時代に突入している。日本における安重根に対する解釈は時代によって大きく変化した。2014 年に中国においても安重根の歴史記念館が創設されたことからもわかるように、日本の歴史認識に対する中国と韓国による日本の植民地支配に対して共有する部分が安重根の義挙という行為である。それに対して、当時の安倍政権の反応は菅官房長官が安重根に対して「テロリスト」「犯罪者」とのレッテルを貼って、かく決めつけていることから、中国と韓国との歴史認識の連帯を「挑発」と受け止め、挑発に対して挑発という姿勢を示したものと考えられる。

日本の国力が相対的に低下し、経済力では韓国が GDP 成長率では日本を追い抜き、中国は世界第二の経済大国になったことで、東アジア地域の日本を取り巻く隣国との関係性はこの 10 年で大きく変化した。そして 2022 年 2 月 24 日にロシアがウクライナを侵攻を開始したことで、中国が台湾を侵攻する可能性の現実化が議論されはじめ、日本の軍事力強化の議論がスピード・アップしているのが今日の現実である。

ロシアがウクライナを侵攻し、再び領域拡大主義が顕著になり、東アジア地域においても中国による台湾に対する侵攻が懸念され、日本の防衛政策も大きく変更せざるを得ない事態になってきた。安重根は、自身の自叙伝である「安応七歴史」を 1910 年 1 月初旬の某日から執筆し始め、3 月 18 日ごろにはほぼ脱稿し、続いてすぐに「東洋平和論」の執筆に着手した。しかし、10 日足らずで死刑が執行され（3 月 26 日）、安の「東洋平和論」は未完に終わった。彼が抱いた「東洋平和論」は東アジア地域平和構想で、現在のアジア三国、日中韓が協力し、連携すべきであると訴え、共同軍隊の配備や三国の共通通貨を発行するための銀行を設置する案など、その構想は現在のヨーロッパ連合（EU）を彷彿させるものであった。東アジア地域の市民であるという複合的アイデンティティは、今まさしく我々日本人、韓国人、中国人に必要とされている。グローバル化の進行や経済格差の拡大、少子高齢化で日本と韓国が共有する社会的・

経済的要因が不安定要因となり他者に対する排外的思考を強めている。その一例が歴史修正主義の台頭である。まさしく安重根の「国家安危労心焦思」という心の叫びは今の日本に通じるところがある。

上述で紹介したテレビ番組「驚きももの木 20 世紀」にコメンテーターの一人に漫画家黒鉄ヒロシがいた。黒鉄は、「被害者は現在進行形で記憶するが、加害者は過去完了形で記憶しがちである」とコメントし、「これを逆にすれば品のいい関係が生まれるのではないか」「安重根はロマンチックな人物」と締めくくり、日本の固定化された歴史認識を批判した。ところが、その番組から 24 年経過した 2019 年 7 月 19 日、テレビ朝日系「大下容子ワイド！スクランブル」にコメンテーターとして出演した黒鉄ヒロシは、元徴用工問題や従軍慰安婦問題で対立する日韓関係がテーマであることに関して、フリップに 2 度の朝鮮出兵を行った豊臣秀吉のイラストを描き、その横に「断韓」と書いた。黒鉄に取材を入れた夕刊フジの記者が悪化する一方の日韓関係について改めて尋ねると、「朝鮮の時代からあの国は、ずーっと同じだ」と答えている[16)]。黒鉄の発言がかように変化した理由は、番組の制作者の意図を汲んだからなのか、黒鉄自身の想いはどのようなものかを知りたいのは筆者だけでないだろう。

おわりに

1932 年に、植民地支配下の京城（現・ソウル）に伊藤博文の菩提寺として博文寺が創建された。それから 7 年後の 1939 年 10 月、ハルビン事件から 30 年目に、伊藤の息子伊藤文吉と安重根の息子安俊生がそろって博文寺を訪れ、「和解」の言葉を交わす総督府主導の儀式が開かれ大々的に新聞メディアによって日本国民に報道された。水野直樹は、「『博文寺の和解劇』と後日談：伊藤博文、安重根の息子たちの『和解劇』・覚え書き」[17)] で、この和解の瞬間は総督府が植民地統治の成果を宣伝するためのイベントであり、安重根の息子安俊生を最大限に利用したことが垣間見られるとした。当時日本国民が入手できる情報源は新聞メディアであることからこのイベント報道は「和解」を介して「内鮮一体」を印象づけるのに日本だけでなく、韓国を含む隣国にとって影響力が絶大であったであろう。日本の優位性を国民の脳裏に刻み込まれたことで、それが人々の意識に埋め込まれた共通認識となる。

しかし、一方で政府の膨張拡大路線に反対する知識人も、安重根を媒介として彼らの思想信条を社会に発信し抵抗していた。伊藤博文の菩提寺としての博文寺が創建された年の『中央公論』1931 年 4 月号に、当時の流行作家であった長谷川海太郎が「戯曲安重根」を発表した（外村、2020、7 頁）[18)]。長谷川海太郎が「戯曲安重根」を執筆したのは、「満蒙問題」をめぐって国論が沸騰しているなかで、長谷川には、19 世紀末から続く日本帝国の膨張主義、軍国主義、他民族抑圧への嫌悪の意識があったのではなかろうかと外村大は長谷川のこころの内を探って

いる。

また伊藤暗殺の大事件が報道されるなか、日本在住の中国人留学生の考えを知ることでこの事件の重層性が分かる（田中、2014、2016）[19]。1909 年 10 月 26 日、伊藤博文が安重根に撃たれたとき、明治大学に留学していた中国の留学生が『清国人日本留学日記』[20] を残している。そこには「伊藤の死は、韓国にとっては気を吐いてよいことで、日本にとっては損失と言えようが、中国にとってはホッと一息というところである。それにしても、安重根は永遠に光を放つであろう」と書かれており、このような内容の日記を書くことは現代ではそんなに難しくないかもしれないが、伊藤が暗殺された翌日の日記に綴られたことであることから、政府に対する恐怖に負けず自分の意志を文に記すのは大変勇気がいることであったに違いない。この学生が新聞の号外を読み、翌日明治大学に授業に行った時に以下の日記を書いている。

> *教師が『伊藤公の死は日本帝国の一大不幸である。しかしながら、諸君は公が死んだからと言って、気を落としてはいけない、諸君は発奮して、伊藤公のように自ら勤め、また伊藤公の志をおのれの志とするならば、伊藤公は死んでも、日本の発展は、公の生存した時よりもはるかにまさるであろう』と言った。僕はこれを聞いて、ひどく腹が立った。日本人の侵略主義は、深く人々のこころに沈み込んでいることがわかる。*

中国人留学生が予言したように、100 年以上経過した今、安重根は永遠に光を放ちはじめ、「日本人のこころ」がいかようかが問われようとしている。

注

1） 龍谷大学教職員組合が安重根の遺墨に大いに関わった背景から本稿は組合の関係者に捧げる。組合の貢献は本稿の 13 頁から 17 頁を参照。

2） 疆理図は、龍谷大学理工学部教授の岡田至弘を中心とする龍谷大学の古典籍デジタルアーカイブ研究プロジェクトによって、デジタル工学に基づく地名の鮮明化や色素・素材分析などによる復元方法が開発され、作製時代の原型が忠実に復元された。これにより原図の文字の解読が可能となった。詳細は、村岡倫（編）『最古の世界地図を読む『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書）法蔵館、2020 年 3 月を参照。

3） Joseph S Nye Jr (1990), *Bound to Lead, The Changing Nature Of American Power*, Basics Books（邦題『不滅の大国アメリカ』）Public Affairs で、Soft Power の概念が紹介され、次に、Soft Power: The Means to Success in World Politics（邦題『ソフト・パワー』）（2004）Public Affairs, という著を刊行。これらは 1980 年代のアメリカ衰退論に異議を唱えた書である。

4) 外務省 HP「Magnetism of Japan ～日本のソフト・パワーを追って～」広報文化交流部、山本忠通と一橋大学 1 年生、野村麻有との対談インタビュー、記事作成は野村による。市民が理解できる外交戦略として、外務省が日本のソフト・パワーの力を説明した。https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/listen/interview2/intv_01.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

5) 李洙任「学習者が「学び」に対して責任を担う教育環境 ― Team Based Learning（TBL）と ICT の活用事例 ― 」『龍谷大学学修支援・教育開発、センター長受賞報告書』、2021 年 3 月。教育の原理はソクラテスやプラトンの時代から「対話」である。学生たちは集団の中で埋没する自分を感じたとき、その学びの質は低下する。ICT を駆使することよって、個人として尊重される教育環境を可能にし、大学で身に着ける教養（Liberal Arts）とは、「人生の足枷を取っ払う力、すなわち自立力を養う」であることを学生たちと教員自身が共に再認識する教育マネージメントを実践した。これはコロナ禍に直面する今こそ必要な点である。そして「スマホを使いこなしている学生たちへ：この厳しい時代こそ PC リテラシーと教養力を高める時期！」というメッセージを伝えた。

6) 詳細は、李洙任「安重根の遺墨と和解に向けての越境的対話」『龍谷大学社会科学研究所年報第 46 号』2015 年、129–139 頁を参照。

7) 歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』（青木書店、2001 年）、高橋哲哉『歴史／修正主義』（岩波書店）、山田朗『歴史修正主義の克服』（高文研、2005 年）

8) 谷野隆「首相談話から見えて来る、この国の歴史認識」『共同研究　安重根と東洋平和　東アジアの歴史をめぐる越境的対話』龍谷大学社会科学研究所叢書第 116 巻、2017 年 3 月 24 日、164–179 頁。

9) 非営利シンクタンク、言論 NPO、「日中韓 3 カ国、有識者調査結果　～日中韓の有識者は「安倍談話」をどう見たか～」2015 年 8 月 25 日　非営利シンクタンク　https://www.genron-npo.net/world/archives/5925-2.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

10) 「菅義偉新首相誕生に韓国が騒然…「安重根はテロリスト」発言が再燃、日韓関係悪化懸念も」2020 年 9 月 14 日、Business Journal, https://biz-journal.jp/2020/09/post_179618.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

11) 戸塚悦朗「龍谷大学における安重根東洋平和論研究の歩み：100 年の眠りからさめた遺墨（上）（下）」「龍谷大学社会科学研究所『社会科学研究年報』第 44 号、2014 年。

12) 2009 年 3 月 28 日に京都龍谷大学安重根遺墨・関連資料展と日韓国際平和シンポジウムが開催され、「なぜ安重根は、伊藤博文を撃ったのか？」と題した日韓国際平和シンポジウムが開催された。報告者は、金鎬逸（安重根義士紀念館館長、中央大学名誉教授）「安重根の夢 ― 大韓独立と東洋平和 ― 」、牧野英二（法政大学教授、日本カント学会会長）「日韓の歴史の新たな歩みのために ― 安重根義士と歴史の記憶の場 ― 」、戸塚悦朗（龍谷大学法科大学院教授「安重根裁判の不法性と東洋平和」の 3 名の研究者が報告した。

13) 『安重根と東洋平和論』李泰鎮（著、編集）、安重根ハルピン学会、（監訳）勝村誠、安重根東洋平和論研究会、日本評論社、2016 年。

14) 『龍谷』2010 年、No. 69　https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/69/11_museum/index.htm、2023 年 2 月 1 日アクセス。

15) 平田厚志「旅順監獄における安重根と二人の日本人教誨師」龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋

平和研究センター・李洙任教授退職記念刊行委員会『安重根・「東洋平和論」研究 ― 21 世紀の東アジアをひらく思想と行動』2022 年、明石書店、第七章、182–207 頁。

16）「黒鉄ヒロシ氏が真相激白 !!　テレ朝情報番組で「断韓」発言直後に韓国語？　スタジオで何が…」2019/7/24 20:20、https://www.iza.ne.jp/article/20190724-K5G2BO2IONKU7CDRT6NITCQ4EU/

17）水野直樹、「博文寺の和解劇」と後日談：伊藤博文、安重根の息子たちの「和解劇」・覚え書き.」『人文学報』第 101 号、京都大学人文科学研究所、2011 年 3 月、（2011 年 3 月）、81–101 頁。

18）外村大「日本における安重根への関心と評価：強権的帝国主義批判とその思想的継承」『社会科学研究年報』第 51 号、2021 年 5 月、121–132 頁。

19）詳細は、田中宏「問われる日本の歴史認識と戦後責任」2014 年 4 月 26 日、龍谷大学社会科学研究所付属機関安重根東洋平和研究センター学術シンポジウムでの貴重講演。於：龍谷大学。田中宏「日本人の戦争観・アジア観についての私的断想」『アジア太平洋研究センター年報』2016–2017 年、2–7 頁を参照。

20）黄尊三『清国人日本留学日記　1905–1912 年』実藤恵秀／佐藤三郎【訳】東方書店、1986 年。

【参考文献】

朝日新聞デジタル「「生きた日韓現代史」崔書勉さん死去　裏から外交支える」2020 年 5 月 29 日配信。https://www.asahi.com/articles/ASN5X35GZN5WUHBI01L.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

IZA「黒鉄ヒロシ氏が真相激白 !!　テレ朝情報番組で「断韓」発言直後に韓国語？　スタジオで何が…」2019/7/24 20:20 配信、https://www.iza.ne.jp/article/20190724-K5G2BO2IONKU7CDRT6NITCQ4EU/、2023 年 1 月 15 日アクセス。

李泰鎮（著、編集）『安重根と東洋平和論』安重根ハルピン学会、（監訳）勝村誠、安重根東洋平和論研究会、日本評論社、2016 年。

外務省「Magnetism of Japan ～日本のソフトパワーを追って～」https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/listen/interview2/intv_01.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

広報『龍谷』2010 年、No. 69。https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/69/11_museum/index.htm、2023 年 2 月 1 日アクセス。

斎藤充功『伊藤博文を撃った男　革命義士安重根の原像』中央文庫、1994 年。

佐木隆三『伊藤博文と安重根』文藝春秋、1996 年。

Joseph S Nye Jr (1991), *Soft Power: The Means to Success in World Politics* Public Affairs; Illustrated edition, 2005.

高橋哲哉『歴史／修正主義』岩波書店、2001 年。

田中宏「問われる日本の歴史認識と戦後責任」龍谷大学社会科学研究所付属機関安重根東洋平和研究センター学術シンポジウムでの貴重講演、龍谷大学、2014 年 4 月 26 日。

田中宏「日本人の戦争観・アジア観についての私的断想」『アジア太平洋研究センター年報』2016–2017 年、2–7 頁。

谷野隆「首相談話から見えて来る、この国の歴史認識」『共同研究　安重根と東洋平和　東アジアの歴史をめぐる越境的対話』龍谷大学社会科学研究所叢書第 116 巻、2017 年 3 月。

中央日報「安重根義士の資料 1000 点を寄贈した崔書勉氏に「韓日フォーラム賞」」『中央日報』／中央日報日本語版、2017 年 8 月 30 日配信。https://japanese.joins.com/jarticle/232848?ref=mobile、2023 年 1 月 15 日アクセス。

テレビ朝日「驚きももの木 20 世紀」、タイトル「伊藤博文を撃った男」朝日放送制作、1995 年 7 月 28 日放送。

戸塚悦朗「龍谷大学における安重根東洋平和論研究の歩み：100 年の眠りからさめた遺墨（上）（下）」龍谷大学社会科学研究所『社会科学研究年報』第 44 号、2014 年。

外村大「日本における安重根への関心と評価：強権的帝国主義批判とその思想的継承」『社会科学研究年報』第 51 号、2021 年 5 月。

非営利シンクタンク言論 NPO「日中韓 3 カ国、有識者調査結果　～日中韓の有識者は「安倍談話」をどう見たか～」2015 年 8 月 25 日配信。https://www.genron-npo.net/world/archives/5925-2.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

黄尊三『清国人日本留学日記　1905–1912 年』実藤恵秀／佐藤三郎【訳】東方書店、1986 年。

平田厚志「旅順監獄における安重根と二人の日本人教誨師」『安重根・「東洋平和論」研究 ― 21 世紀の東アジアをひらく思想と行動』龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター、李洙任教授退職記念刊行委員会、明石書店、2022 年。

Business Journal「菅義偉新首相誕生に韓国が騒然…「安重根はテロリスト」発言が再燃、日韓関係悪化懸念も」2020 年 9 月 14 日配信、https://biz-journal.jp/2020/09/post_179618.html、2023 年 1 月 15 日アクセス。

水野直樹「「博文寺の和解劇」と後日談：伊藤博文、安重根の息子たちの「和解劇」・覚え書き」『人文学報』第 101 号、京都大学人文科学研究所、2011 年 3 月。

村岡倫（編）『最古の世界地図を読む『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書）法蔵館、2020 年 3 月。

山田朗『歴史修正主義の克服』高文研、2001 年。

歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』青木書店、2005 年。

Valuable historical sources: Ahn's Jung-Geun's calligraphic works at Ryukoku University and their peaceful use

LEE Soo Im

Ryukoku University is one of the oldest universities in Asia, and its history of over 380 years began in 1639, with the establishment of the student hostel Gakuryo within the Nishi Hongwanji Temple grounds.

Some of the valuable historical resources Ryukoku University stores are highly challenging to display to the public. One such resource is Ahn Jung-geun's calligraphic works. Ahn Jung-geun is known for assassinating Hirobumi Ito, the first Resident-General of Korea, at Harbin Station on October 26, 1909, when the Russian Empire had interests in northern Manchuria. Russian officials arrested Ahn Jung-guen and handed him over to the Japanese government of Kwantung. He was executed in Lushun Prison on March 26, 1910. However, in Japanese education, there is almost no chance to learn about the kind of person Ahn was, let alone to discover the motives for and background of his assassination of Ito. It is no exaggeration to say that it is taboo to delve into and attempt to understand such topics in Japanese society. Because of this social and cultural taboo the calligraphic works of Ahn Jung-geun stored at Ryukoku University have long been kept if they were a lost treasure, with little social knowledge of its existence.

However, as if Ahn Jung-geun had been revived, the public was made aware of the existence of the historical resource of his calligraphic works. In May 2013, the Ahn Jung-Geun East Asia Peace Research Center was founded at Ryukoku University. The center's name derives from the idea of peace in East Asia, something to which Ahn aspired. He strongly believed in the union of China, Korea, and Japan to counter Western imperialism, and restore East Asian independence. The center's purpose is to reconsider the idea of peace in East Asia and the independence of the countries in the region, for which Ahn strongly advocated. The messages Ahn left to society are important, particularly today, when people feel anxious about their futures. This article records the progress of the Ahn Jung-geun Center in pursuing such aims and makes society aware of this side of history.